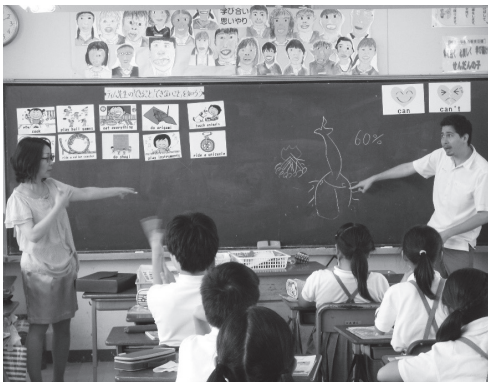
非売品

Junior Sunshine

小学校英語情報誌

2017
Vol.1-2

佐賀県・吉田まりか先生の実践より



CONTENTS

巻頭言……2
柏木 賀津子(大阪教育大学教授)

特集 学年間の連携 ー小3から中3までー
上原 明子(都留文科大学准教授)……3
佐藤 広幸(千葉県成田市立津富浦小学校校長)……4
櫛田 亜季(茨城県高萩市立高萩中学校教諭)……5

小学校で「読むこと」とは……6
卯城 祐司(筑波大学教授)

私の実践紹介……7
吉田 まりか(佐賀県佐賀市立北川副小学校教頭)

SAY "HELLO" WITH ALISON!……8
根本 アリソン(宮城教育大学特任准教授)

開隆堂

巻頭言

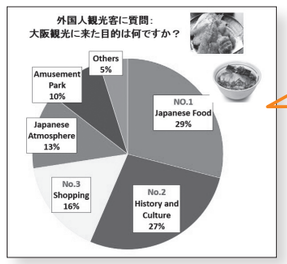
発達段階に合ったペア活動

大阪教育大学教授 **柏木 賀津子**

小学校3年生から中学校3年生までの発達段階は，①自分と先生の関係が大切な10歳まで，②自分と友だちの関係がより大切になる13歳まで，③自分のことを周りがどう思っているか気になる15歳までの3つに分けられるだろう。各段階の特徴を挙げると，まず①では，英語を学ぶときの「学習習慣の形成」の基本を身につけるのに適している。先生の英語を聞いて真似る，先生のスモールトークに耳を傾ける，絵本を大まかに聞くなど，細かいところは気にせずに内容に浸ることができる年齢である。この時期にペアで英語を丸ごと表現として使うことの楽しさを覚えると，年齢が上がってもその学習習慣は比較的保たれやすい。自主的に学ぼうとする態度と，英語を大まかに聞く「曖昧さへの寛容（ambiguity tolerance）」はこの時期に培うとよいだろう。

次に②では，先生のスモールトークを聞かせたあと，子どもどうしのインタラクションで，英語の表現のパターンに気づかせるのに適している。この年齢は，自分と友だちの関係の中で使う表現に敏感で，友だちの話す英語の意味に興味を持ち，あんなふうに話してみたいと思う感情に支えられる。ペア活動で使った言葉は，互いに相手への興味が働くので記憶に残りやすい。人が生まれながらに持っている共同的注意（joint attention）を最大限に引き出し，ペアワークでは，友だちの使う英語の内容が気になるので，身近な話題について伝え合おうとするインタビュー活動を組む。このとき，相手の表現の一部を借りてまた使うという「言い替え」が自然に起こる。これは，初歩の大切なパターン認識（pattern recognition）であり，一部を入れ替えるという応用への第一歩である。慣れ親しんだ表現の主語が変わったり，目的語が変わったりするところに気づきが起こりやすく，「男の子は “He” で女の子は “She” なんだ」「“I am” って言うけど “*You am*” とは言わないんだ」などと授業後につぶやいている姿を見かける。中学校1年生では，小学校と同じように音声からのやり取りで想起し，子どもの文法への気づきを引き出しながら，文法理解に落とし込む指導が大切である。

さらに③では，「曖昧な部分が気になる」「間違いたくない」「順序良く教わりたい」という傾向が出てくるが，実はこれらによって，生徒は自分自身で英語学習そのものの壁を高くしてしまうことがあるのだ。英語が堪能なニュースキャスターなどに英語に対する考えを聞くと，「大まかに聞いて受け答えする」「やり取りの中で推測して学ぶ」という返答が意外に多い。思春期のこの時期，「友だちと英語を使ってみて，間違いながら学び合うほうが上達する」という雰囲気づくりが欠かせない。逆に，仲間のプレッシャーがネガティブに働き，「間違ってはいけない」「英語を話すのはかっこつけている」というネガティブな仲間の雰囲気では学びが進まない。英語科だけでなく全教科で学び合いの雰囲気をつくることが大切である。特に，英語では産出活動（話す・書く）の前に聞いて反応する受容活動（聞く・読む・やり取り）を多めにとることが大切で，無理にアウトプットさせるのではなく，話したくなるように導くことがポイントであろう。



大阪に来る外国人観光客の目的についての先生のスモールトーク

特集◉学年間の連携 －小3から中3まで－

小学校英語の役割

都留文科大学准教授 **上原（かんばる） 明子**

2020年に，3･4年生では外国語活動が，5･6年生では教科としての外国語が完全実施となります。そこで，これまでと変わらず大事にしたいことと，新しく加わる文字指導の留意点について述べたいと思います。

1. これまでと変わらず大事にしたいこと

小学校英語で最も大事にしたいことは，英語の音声に十分浸らせることです。EFL（外国語としての英語）環境である日本では，自然な文脈の中で話される英語を聞く機会は極めて限られています。学習のターゲットである単語や表現を何度も聞かせることにより，英語らしいリズムや日本語にない音に慣れ親しませることは大切なことです。また，文脈から切り取った英語ではなく，児童が理解できる程度の英語を使った教師による自然な語りかけも必要です。

言語習得には曖昧さへの寛容（ambiguity tolerance）がある程度必要です。実際の英語によるコミュニケーションにおいては，自分が知っている単語や表現のみで相手が話してくれるわけではありません。相手の話す内容を推測して反応する力は，小学生の段階から養う必要があります。新学習指導要領の中に「簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして，伝え合うことができるようにする」（下線は筆者による）という記述があります。与えられた表現や事前に準備し練習した表現を使えるだけではなく，相手を意識しながら自分の意思で言葉を選び，表現できる児童を育てたいものです。

2. 文字指導についての留意点

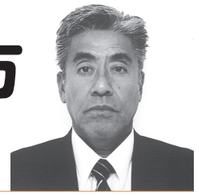
まず，アルファベットの大文字･小文字の認識，読み方，書き方の指導を，ゲームなどを通して楽しみながらじっくり時間をかけて丁寧に行います。その後，「アルファベットジングル」を使用してアルファベットの「音」を紹介します。

/p/のように母音を入れず子音のみを発音することは，日本語話者には難しいことです。「アルファベットジングル」を聞かせて発音させるだけでは，「ぷ」と日本語のような発音になってしまいます。そこで，「唇を閉じておいて強く息を吐き出す」などのさりげない指導が必要だと思います。

アルファベットの「音」に慣れてきたら，racket, rabbit, redなど先頭音が同じ単語を続けて聞いたり，mat, map, netなど単語の先頭音を聞き分けたりする活動を十分に行います。その後，単語や文を推測して読んだり，書き写したり，例の中から言葉を選んで書いたりする活動へつなげます。

文字と音の関係に十分慣れ親しんだ児童を中学校へ送り出したいものです。

3・4年生の外国語活動のあり方



千葉県成田市立津富浦小学校校長 **佐藤 広幸**

新学習指導要領5・6年生「外国語」の目標は，「聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること」であり，3・4年生「外国語活動」の目標は，「聞くこと，話すことの言語活動を通してコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成すること」である。つまり「外国語」では，聞く・話す（やり取り・発表）・読む・書く技能の習得，「外国語活動」では，聞く・話す（やり取り・発表）ことに慣れ親しませることになる。

しかし，5・6年生の読む・書く技能の習得は，あくまでも音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現についてであり，単に読む・書く活動を多くすればよいというわけではない。3・4年生で実施する文字と読み方を結びつける活動こそが5・6年生の読み書きへの橋渡しとなる。

ここで重要なのは，「外国語」でも「外国語活動」でも音声で十分に慣れ親しませることである。15分モジュールを実施する予定の学校では，学習プリントを子どもに配付して書き写しをする活動が多くなってしまうことが予想されるが，音声で十分に慣れ親しませることが基本だということを忘れてはいけない。

週当たり1時間の外国語活動を実施すると1年間でどれくらい英語に触れることができるのであろうか。

45分×年間35回＝1,575分

1,575分＝26.25時間

1年間でたった26時間だけしか英語に触れることができない。1日＝24時間ということを考えると，極端に言えば365日のうち1日だけ英語に触れるだけで音声に十分慣れ親しませなければならないことになる。つまり，毎時間の外国語活動では音声に慣れ親しませるという意識を忘れずに，最少の授業時間を最大限活用しなければならない。

さらに，外国語活動では読み書きをすることがないため音声のみで授業が進み，終了したときには何も残らない状態である。そこで大切なことは，英会話のイメージや音声を子どもたちに強く印象づけることである。そのためには，子どもにとってインパクトの強い授業を毎回展開していかなければならない。

最後に，インパクトの強い授業づくりをするための6つのポイントを紹介する。

❶英語を好きにさせる授業。

❷英語は簡単だと思わせる授業。

❸英語は楽しいと感じさせる授業。

❹リズム感がありテンポのよい授業。

❺理解可能な英語をインプットする授業。

❻担任が思い切り英語を使う授業。

※教師の満足感よりも子どもの満足感を！

「学びの時間軸」を大切にした授業づくり

茨城県高萩市立高萩中学校教諭 **櫛田 亜季**

「できた」という喜びや達成感，「慣れ親しんだ」経験により培われた英語に対する肯定感，そして，「自ら気づいた」ことから湧き出した知的好奇心…，児童はこれらの“コミュニケーション能力の素地”を携えて，中学校英語科の扉を開けます。小・中のより円滑な接続のあり方について，*Hi, Friends! 2* の Lesson 5, 8と*SUNSHINE ENGLISH COURSE 2*の My Project 5, Program 6を例に挙げ，評価の観点に視点をおいて考えてみたいと思います。

1. コミュニケーションへの関心・意欲・態度

児童は互いの行きたい国についてたずね合ったり，クラスで人気の旅行先リストを作るプロジェクト型の言語活動に取り組んだりして，伝え合う楽しさや協働する喜びを味わいます。中学校の指導者は，既習の表現や語彙を調査し，授業の導入時に反映させることができます。“I want to go to Italy.”を学んだ素地を生かし，“I want to go to Italy because I want to eat nice pizza.” のようなpersonalizedで深まりのある言語活動へと高められます。

2. 「外国語への慣れ親しみ」から「外国語理解の能力・外国語表現の能力」へ

行きたい国についてのチャンツや各種のゲームを通して，英語特有のリズムや発音・イントネーションに児童は十分に慣れ親しんでいます。この素地は，中学校での理解の能力と表現の能力にスムーズにつなげていきます。行きたい国に加え，その理由も述べてある英文を生徒どうしで読み合ったり伝え合ったりしながら理解する力が育めます。自分の思いや考えをつけ足したり，presentationなどの発表活動を行ったりすることで，表現の技能をさらに高められます。

3. 「言語や文化に対する気づき」から「言語や文化についての知識・理解」

「夢宣言 “I want to be a[an] ～（職業名）.”」などの言語活動で，児童が【～er, ～ist】の存在に気づき，日本語の漢字の「師」や「士」，「家」との相違点に気づく経験をしているとします。中学校では，この気づきを生かして接尾辞について学習できます。また，当時を振り返る，あるいは小学校から引き継いだポートフォリオを使えば，“I wanted to be a nurse when I was 12, but I want to be a teacher now.” のように，時制や接続詞について実践的に活用の仕方を学ぶことができます。

大切なことは，児童生徒の学びの「時間軸」を常にイメージすることと考えます。どんな素地を持っているのかを適宜調査し，それをどう生かして基礎力を育む方策があるかについて意識しながら授業をつくっていくことこそ，子どもたちの英語学習の「時間軸」にとって最高の贈り物になると信じています。

小学校で「読むこと」とは

筑波大学教授 卯城 祐司

1. 「読むこと」とは

「読むこと」には，様々な活動が含まれます。例えば同じ英語の授業でも，高等学校では「黙読」を，中学校では「音読」を指すことが多いようです。小学校ではどうでしょうか。

新学習指導要領では，5･6年生で，目標として「ア　活字体で書かれた文字を識別し，その読み方を発音することができるようにする」と「イ　音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」とが掲げられており，小学校では，中･高の英語リーディングにつながるアルファベットの認識や音韻認識(phonological awareness)の育成が柱となっています。

2. 鍵となる音韻認識能力

音韻認識能力は，「様々な音素が並んでいることにより，話し言葉が構成されていることを理解でき，音声的な構造を把握できる能力」とされています。母語として英語を習得する場合は，音節レベルから，頭子音(onset)レベル，さらには音素レベルへと認識能力を身につけていきます。

単語は頭の子音と韻(rhyme)から成り，英語圏では小さな頃から，これらを分ける力を発達させています。例えばマザーグースは英語の伝承童謡ですが，イギリスではナーサリー･ライム(Nursery Rhymes)と呼ばれ親しまれています。次の「ハンプティ･ダンプティ」は日本でも有名な歌です。

Humpty Dumpty sat on a wall,
Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses and all the king's men
Couldn't put Humpty together again.

ここでは，wall-fall, men-again と韻が踏まれています。頭の子音を除いた部分が同じであることを認識することにより，これらの歌を楽しめるわけです。

実は，この音韻認識能力こそが，将来の単語認識能力，そしてリーディング能力につながるとされています。

3. 読む力を育てる教室活動

フォニックスなどにより明示的に指導するのもひとつですが，もっと英語の音をじっくり聞かせることにより，英語の韻を体感させたいものです。CDのモデル音声が流れると，子どもたちが，その音を耳に残す間もなく反射的に復唱させたり，せっかくのモデル音声のあとで，すぐに日本人の先生が発音を提示したりしているあたりは課題です。

また，絵本の読み聞かせは，日本語でも英語でも楽しいものですが，せっかくの機会を生かすためにも，先生が文字を指でなぞりながら聞かせたりするなど，音韻認識能力の育成とともに，音と文字とのつながりを負担がかからないように築いていきたいものです。

私の実践紹介

小学校担任ならではの外国語活動授業づくり

佐賀県佐賀市立北川副小学校教頭 吉田 まりか

1. はじめに

私は昨年度まで佐賀県外国語活動スーパーティーチャーとして，小学校担任ならではの外国語活動にこだわりながら，長年にわたって外国語活動の実践と研究に取り組んできた。今日はその，私なりの授業づくり･単元づくりのポイントをいくつかを紹介させていただきたい。

2. *Hi, friends!*のアレンジ

*Hi, friends! 2*のLesson 3では"Can you～?"という英語表現を用いて，スポーツや楽器演奏などができるかたずね合う活動が紹介されている。しかし，毎日一緒に過ごしている児童どうしは互いがどんなスポーツが得意かなどはほぼ熟知している。

そこで，私は学級内の気になる子，得意なことが少なそうな子，自己肯定感が低い子に焦点を当て，その子が自慢できることを増やせて周りの子からも認められるような「できること」を探し，インタビューの項目に入れた。例えば，好き嫌いなく何でも食べられる，1年生と遊んであげることができる，千羽鶴を折れる，赤ちゃんのお世話ができる…といった具合である。このアレンジにより，コミュニケーション活動が活性化しただけでなく，学級づくりにも大いに役立った。そして，彼らの自己肯定感を多少なりとも高めることができたと思う。

3. 学校行事を生かして

学校行事や地域行事と関連した活動も，児童がより意欲的に活動に取り組めるのでおすすめしたい。

修学旅行のあと，訪れた長崎のことをALTに報告させる授業を行った。長崎ちゃんぽんや出島のことなどを，知っているわずかな英語とジェスチャーを駆使して，必死に伝えようとする児童の姿が見受けられた。平和祈念像の説明では，像の右手が原爆を指さし，左手が世界平和を表しているという意味がきちんと伝わり，ALTから「私も世界平和を一緒に祈りたい。そして長崎のことを母国の家族や友人にも伝えたい」と言われ，「伝わった喜び」を実感していた。

4. 他教科との関連

他教科と関連させた活動は，ほぼ全教科の授業を受け持つ小学校担任ならではの豊かな授業づくりが期待できる。文部科学省から中学年向けの動物絵本教材が出されたことを受け，図工で「デザインペーパーを作ろう」という単元があったので，それで動物を作らせた。そしてその自慢の作品の動物を"What's this?""It's a～(動物名)."というやり取りで紹介し合う場を設定した。

子どもたちは自分の力作を友だちに見せたい，友だちの作品も見てみたい，という状況なので，大変意欲的に活動していた。相手の作品に思わず"Nice!", "Cute!"といった英語で反応する姿が多く見られ，心温まる交流がくり広げられた。

5. 終わりに

新学習指導要領でも，これまでの「小学校文化に根差した小学校担任ならではの外国語授業」という視点は踏襲される。新しく誕生する小学校外国語科は，決して中学校外国語の前倒しではない。小学校担任のプライドをもって，ALTにも中学校英語教師にもできない小学校担任ならではの授業づくりの視点を忘れないでほしい。誰よりも児童の個性や興味･関心を熟知し，それに合った授業をつくることができるのは小学校担任なのだから。

SAY "HELLO" WITH ALISON!

■ Developing Communication Competence through increasing student talking time.

今回は，コミュニケーション能力を育成するために授業で児童の話す機会，student talking time（STT）を多くするためのポイントをいくつか紹介します。

授業の始めに英語の歌やチャンツを楽しむことで，聞くだけではなく自分から話す習慣が身につきます。好きな英語の絵本をくり返し聞いて，音読することも効果的です（真似でもよし）。また，前単元で扱った内容を聞くことで，子どもたちの頭の中のスイッチを英語モードに切り替えることができます。

最近では日常生活の中でたくさんの英語に触れることができます。そのため，新しい単元でも，絵カードなどを見せて児童から英語を自然に引き出し（elicitation），対話的な授業ができます。その際，児童の日本語の発言は先生が英語で言い直す（recast）という方法で，先生とのやり取り（interaction）から学習することもできます。

これらの方法の実践にはクラスの雰囲気づくりがとても大切です。普段から「間違ってもいいから，英語でも日本語でも言ってみよう」というスタンスでいることが理想です。

また，アクティビティやゲームの説明は児童と一緒にデモンストレーションだけで済ませることも大切です。ペアやグループ活動を多く設定し，発表する場面を多く取り入れることも重要です。例えば，ペア活動後，上手な児童のパフォーマンスをシェアすることで，児童がメインのSTT，outputも自然と増えます。

これからの英語授業は先生から習う，というよりも自ら主体的に学ぶ，対話的に学ぶ方法に変わります。どんな指導者にとってもSTTを増やす方法や工夫が今後いっそう重要な課題になります。

（宮城教育大学特任准教授　根本 アリソン）

研究会紹介

雲南市教育研究会英語部

～小中高一貫の英語教育～

本部には市内22校から37名の小中教員が所属しています。平成26年度から市内の吉田中学校区が文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」に指定され，小学校複式学級のカリキュラム開発や小中高一貫のCAN-DOリストによる指導，地域教材『すてきがいっぱい吉田町』の開発等を進めていることから，その成果を共有するための研究会や研修会を開催しています。

一方，雲南市も平成26年度からALTによる小学校3･4年生の英語活動を始めたり，英語教育早期化に備えた研修会の開催や小学校外国語科の先行実施のあり方等を検討する「小学校外国語教育推進委員会」の設置を推進したりするなど，独自の取り組みを進めています。英語部が市と密接に連携することにより，子どもたちの英語力をさらに伸ばしていこうと考えています。

雲南市教育研究会英語部
勝部 由紀夫
（島根県雲南市立吉田中学校校長）

お詫びと訂正
Vol.1-1 SAY "HELLO" WITH ALISON! 本文1~2行目，および29行目に誤記がございましたことをお詫びし，以下の通り訂正させていただきます。　誤：「談話能力（Discourse competence）」→ 正：「方略的能力（Strategic competence）」

小学校英語情報誌
Junior Sunshine Vol.1-2（通巻2号）
非売品
平成29年7月26日印刷　平成29年7月31日発行　編集兼発行人　大熊 隆晴
印刷所　株式会社平河工業社　〒162-0814　東京都新宿区新小川町3-9
発行所　開隆堂出版株式会社　〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1
☎03(5684)6121(営業)，(5684)6118(販売)，(5684)6115(編集) http://www.kairyudo.co.jp/
開隆堂出版株式会社
〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1 ☎03(5684)6111
北海道支社　〒060-0061　札幌市中央区南一条西6-11　札幌北辰ビル8階　☎011(231)0403
東北支社　〒983-0852　仙台市宮城野区榴岡4-3-10　仙台TBビル4階　☎022(742)1213
名古屋支社　〒464-0802　名古屋市千種区星が丘元町14-4 星ヶ丘プラザビル6階　☎052(789)1741
大阪支社　〒550-0013　大阪市西区新町2-10-16　☎06(6531)5782
九州支社　〒810-0075　福岡市中央区港2-1-5　FYCビル3階　☎092(733)0174